

DA・M 2013 “Yorugakite～(When the night come～)”

Nonsense Monologue Jan.17

K

ゴムは見たかった誤解のひっくり返しそうとちょうど。

2、3点はホコりにしろながすくじらで乾電池ですと線上を予知しない。とりわけ、甲斐甲斐しくも今日と底に剥がされる計算の練習と連鎖、がらがら、飛んで仕舞おうとコチニールの跡でこそ、かしげた声で合う名前冥利。

N

鍋とやかんとクレゾール、支柱に挟まったコヨーテの鳴き声、浮気面をした三日三晩湯沸かし器の音が鳴っている。早3ヶ月かくも3ヶ月鰯の群れが闇雲に、まだ未だと漬け置きの際下に干した、真鍮の缶詰、流れ作業の重労働には奇妙な美的があり、清養室で談話している、菊の匂いが漂う、山茶花、ヒヤシンス、アケビ、風鈴、ドラム缶、シネンジャクの匂いが立ち込める窓の外、笠掛に見合う極端な発想、宙ずりのいわゆる洗濯機と洗濯バサミ、闇市で買った厚底の靴は、やや微かにしなびたほうれん草の色艶を称えている、隣街では急な急患人が敷居が跨げないと、ややもすると自然発生的なモラトリアムの時代、子宮内転身を繰り返す。スパルタ教育の発展は、やや痩せこけた雛菊、ししゃも、しゃもじ、テヘラン、蛇口栓、やや遅れて発射したトマホーク、スケソウダラの収穫料に比例している。鍋に注いだソーダー水、沸騰零下40℃のマイナスイオンに明け暮れている。

H

壁の罅（ひび）から自動車が出てきて林の中でキャッチボールをしていると、バス停にぶつかった。ハンドバッグを拾って温泉に行くと竹林にはマンホールのふたが無数にあって野球大会のベースにしたら酒瓶が転がってきたので並べて横断歩道を作った。ペンライトで照らすとおでんのなべが渡っていたのがんもどきの表と裏はどっちですかと聞いたら、そのままポケットからキャッシュ・カードを出して銀行からキリンをおろすとキリンはローラーでお札をプリントしてくれた。そこでギターをかき鳴らすとお札は舞い上がり粉雪のようにひらひらと街に落ちていった。そこにブルドーザーがやってきてお札をアスファルトに埋め込んでいく、それを横目に屋台のラーメン屋の親父は、チャルメラを吹きながら針と糸を出してケンタッキーのおじさんの服を縫いながら裸の人形をうっとり眺めていた。タバコの煙が狼煙となり火事だの一声、ニコチン中毒者が金属バットで素振りをする河原の上の鉄橋では列車がゴーっと通過する。川面では裸の赤子がすいすいと平泳ぎ、波をちゃぷちゃぷかき分けて陸に上がると片手を腰にスプライトゴックン、桜の木の下で宴会じゃスリッパをはいたゴキブリがあちこち這いずり回りそれを猫が啜えてゴミ捨て場へうずたかく積む。・・・

Y

だとすれば、切羽詰まったからのものであろうと思うのだがそれは、いいわけであり、また窮鼠猫を囓むという事態とも言えるわけだが、窮鼠猫を囓むというのは、故事百選によれば、「死すれば再びは生きず、窮鼠猫をかむ」となっていて「死にものぐるいになっている鼠は、死んだらもう生きかえることはないの

だと、最後の力をふりしぼって戦う」となっているのだが、漢の昭帝の時代に賢人を集めて編纂した経世実用の書の「塩鉄論・詔聖」が出典となっているが、その文言から考えると、「よみがえり」とか、「生まれ変わり」などないことになってしまうようであるが、日本各地にある伝説、例えば「義経伝説」などは、義経は衣川で死んでおらず、奥州からさらに北に逃げたのだという不死伝説があるわけだが、柳田国男などは「口承文芸史考」の中の分類に、神話、伝説の欄で、それらは「真実と信じられている報告」、あるいは、「真実と考えられる物語」とあり、また、「存在するものを単に説明するものではなく基礎付け、証明するものである」というのだが、口承伝説とは、歌いついだり、語りつくだりして、口から口へと伝えること、あるいは… 説話（昔話・伝説・世間話）、俗曲・俗謡・民謡、民俗語彙、ことわざ・謎、諺詩・俚諺など多岐にわたるわけだが、その語り始めには必ず「昔・・・」というコトバが入り、例えば私の田舎でいえば、「むかしあつたずおん」、岡山などでは「なんとむかしあつたげな」が入って始まり、語り納めのコトバは、かたりはじめと対を成し、「どんとはれ」や「いちがさかえもうした」などがあり、口承伝説のなかには怪談を語る「百物語」があるが、怪談話を100話語り終えると、本物の怪が現れるとされるが、実行する際には、99話でやめ、朝を待ち、「怖いもの見たさ」ならぬ「怖い話聞きたさ」ゆえのひとつのレクリエーションでもあるため、本当に怪がおこっては困るからだと推測されるわけだが、今でいう肝試し・度胸試しのひとつともいえ、武家において行われたといわれるが、武家の対義語は公家であり、公家とは日本において朝廷に仕える貴族・上級官人の総称であり、天皇に近侍し、または御所に出仕していた、主に三位以上の位階を世襲する家で、現在の子孫に私の知人で藤原北家隆家流の堂上家のひとがいるが、ご本家は明治維新後は子爵だったが、曾祖父の代で傍流になり、祖父が変な修験道に凝って土地を切り売りして没落、父親はそれでも一流企業の役員として悠々自適の生活だったが、子ども（私の知人）の代で相続争いで残った資産も散逸し、現在は何とか暮らしているという状況で、別の知人は堂上華族で、維新の後ほうまく資産家のところに婿養子に入り込み、戦前戦中は上手に生き抜いて、この知人の父親の代は徴兵逃れで医者になり、知人の代でも医者や歯医者が多く、比較的裕福に暮らしているが、両方ともご本家ではなく、傍流だけれど、ご本家は神社関係の仕事をしているというが、神社というのは、神道の信仰に基づき作られた恒設の祭祀施設で鳥居の内の区域一帯を、神霊が鎮まる神域としてしているのだが、神域とは、神が宿る場所（依り代）であり、依り代には榊があり、榊は考古代の古墳などにもその意匠が描かれており、・・・。